

JASE

# 現代性教育 研究ジャーナル

2014 年

No. 37

2014年4月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE  
ASSOCIATION  
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info\_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭  
© JASE. 2014 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

## contents

|                           |                     |
|---------------------------|---------------------|
| 「関西性教育研修セミナー2013冬」報告 …… 1 | もっと知りたい女子の性① …… 10  |
| 「東京性教育研修セミナー2014冬」報告 …… 7 | 今月のブックガイド …… 12     |
| 性教育の歴史を尋ねる⑬ …… 9          | JASEインフォメーション …… 13 |

## ■「関西性教育研修セミナー 2013 冬」報告

# Living Together

## ～池上千寿子が歩み続ける道～

2013年12月21日(土曜日)午後1時30分より、大阪府立大学「I-site なんば」において、「Living Together ～池上千寿子が歩み続ける道～」をテーマに関西性教育研修セミナーが開催された。2011年第20回WAS国際会議でゴールドメダル(金賞)を受賞した池上さんを迎え、HIV/エイズのこれまで、性科学等について、「性の健康/権利」「協働」「教育」をテーマに講演していただいた。

主催：関西性教育研修セミナー実行委員会

## はじめに

冒頭、日本性教育協会運営委員の宮原忍氏が、池上さんをユーモアを交え紹介された。

池上さんは東京大学を卒業後、出版社勤務を経て翻訳を中心に執筆活動を始め、1982年にハワイ大学に留学。帰国後、1994年にぶれいす東京を設立しエイズ予防とケアの活動に従事し、2012年まで代表をつとめられてきた。現在は、NPO 法人ぶれいす東京顧問・理事である。

今回のセミナーでは、池上さんみずからが、歩み続ける道を語り、その後、大阪市立総合医療センター感染症センター医長の白野倫徳さんとアーティストのプブ・ド・ラ・マドレーヌさんとのゲスト対談

を行った。その後、会場とのディスカッションが行われた。

ここでは、池上さんが語った「Living Together」の道を中心に、その概要を紹介する。



## 男と女は別ものなのか

人生に目覚めたといったら何ですけれども、LT (Living Together) の基本が10歳のときです。小学校4年生のとき、クラスメートの男の子から、「女が勉強して何になる」と言われました。大変ショックを受けました。男と女って、今の言葉で言えば「LTしていない」ということを突きつけられたわけです。

片や、アメリカのホームドラマなどを見ると、何やら幸せそう。LTっぽい雰囲気、夫婦が少なくとも会話していると感じ、つまり、アメリカの女性に何か学べることがあるのではと、アメリカ女性史を大学で専攻することにしました。日本の女性たちが、あるいは男女がもう少しLT、ともに支え合って生きていくには、何かが欠けている、欠けているものは何かを探すためにアメリカ女性史を勉強したところ、基本は同じだということに気づきました。

どうして男と女は全く別だと言われるのか。結局性なんです。性器が違うでしょう、性器の違いは生き方の違いです、性器の違いは役割の違いです、こうなるわけです。

そのころは、性とか体についての情報が本当になかった。女性の体についての本といったら、妊娠、出産と更年期だけでした。「女は子宮があって、産む性で、受けとめる性で、だから、仕事はできなくて、仕事をしたとしても責任ある地位にはつけないで、子育て、育児、結婚しか道はない」と言われていて、自分の体と性について、どちらかというと非常にマイナスのイメージをもっていました。

## ルシエン・ランソンとの出会い

1975年にメキシコで初めて国際婦人年がありました。これは行かなきゃというので、行きました。その後、サンフランシスコに渡って、日系移民の性を研究しました。そこで出会ったのが、『From Woman to Woman』、ルシエン・ランソンが書いた本です。

Q & A形式で、これを読んで、本当にうれしかった。自分の体はこんなにすばらしくできていて、こ

ういうふうにつながっていて、こういうふうに機能しているんだということが初めてわかりました。生理ってこういうことなのね、という基本中の基本から始まって、性器ってこういうふうになっ



ているんだということも……。日本の女性たちにこの情報がないから、伝えなければいけないと思って、日本に持って帰って翻訳しました。邦題は『ランソン先生のからだの本』です。

その後『ランソン先生のからだの本』を読んだ根岸悦子さんという産婦人科のドクターが『ウーマンズ・ボディー』というすごい本を訳したいと思っていました。一緒にやってくれる人を探していたのです。私に会いたいということで連絡がきました。

私もその本を持っていて、いい本だと思っていました。初対面の2人が本をはさんで盛り上がり、コーヒー一杯で4時間も語りあってしまいました。「ぜひやりましょう」ということで、初めての協働が成り立ちました。

ドクターと、ドクターでない人間が組んで性と体の本を訳すという場合、普通は「訳者・池上千寿子、監修・ドクター根岸悦子」です。これって監修者と職人なんです。そういう分担と位置関係です。ところが、彼女はその構図はやめようといいました。この後、根岸悦子、池上千寿子の共訳、もちろん役割分担はあります。翻訳の具体的なことは私がやりました。根岸さんはすごい人で、本を選んでくるんです。いい本ばかり持ってくる。「本が私を呼んでいる」と言う。「書店に入って、見るでしょう。この本が、やって、やって、手にとってと言っている」と言うわけです。それを本当に持ち寄って、相乗効果を発揮できて、2人で30冊翻訳しました。

『ウーマンズ・ボディー』は、膣の中にペニスがいん挿されていて、射精があって、精子が泳いでいて、ここら辺で卵を取り合うよ、という図を

初めて出したのです。

性に関する、体の性器にかかわる言葉を訳していくわけですが、私は「恥毛」に引っかかった。“pubic hair”という。恥ずかしいって何です？

日本語では、恥毛に恥骨に恥丘でしょう。これはちょっと嫌だなと思って、相談して、「恥毛」はやめようというので、つくったのが「性毛」です。これが別にベストだとは思っていません。でも、性器のあたりにある毛だから性毛でいいじゃない、体毛と性毛と頭髮で、訳語をそれにしましたのです。なぜか、その後も使われています。

## ハワイでエイズに会う

『ウーマンズ・ボディー』を出したときに、これを教科書にして、朝日カルチャーセンターで音読会をやりました。声に出せない人が圧倒的に多かった。セックス、膣、ペニス、マスターベーション、性交、これらの言葉を人前で口に出して読むということに大変抵抗があった女性が多かった。

この本を持って、全国を回って活動しながら、喫茶店に寄っては、やれペニスがどうの、セックスがどうの、マスターベーションがどうの、膣がどうの、性交がどうのと話していたわけです。これは1980年の話です。

私は、人前で公然と性を語るというので「セックス姉ちゃん」と言われました。その後、「コンドームおばさん」と言われるようになります。

翻訳をやっていると物足りなくなっていて、きちんと勉強するにはどうしたらいいのでしょうか、ということをお聞きしました。そこで紹介されたのがミルトン・ダイヤモンド教授です。根岸さんにも、「ハワイ大学にミルトン・ダイヤモンドという人がいるから、行っておいで」とすすめてくれました。

ハワイ大学で出会ったのが「ダイバーシティ（多様性）」です。ダイバーシティとエイズに出会いました。“Pacific Center for Sex and Society”、「性と社会太平洋研究所」と勝手に訳していますが、ハワイのゲイ・アイデンティティ・センターを立ちあげた代表と、そのパートナーと出会いました。ダイヤモンドの研究室の学生だった人です。

ハワイ大学は、アメリカの州立大学で初めてゲイグループをキャンパス内に公認した大学です。ダイヤモンドは、当時トランスセクシュアルと言われていた人たちのカウンセリングをやっていましたので、そういう仲間たちとたくさん出会いました。

ハワイで多様性と同時にエイズに出会いました。

1981年にエイズがアメリカで報告されて、ハワイでは83年に初めての患者さんが出ます。ハワイは第一号の患者さんから診療拒否が一切ありませんでした。街中で起きた差別というのも報告されていません。それはなぜかという、私は82年にハワイ大学に行きましたが、そのころはもうアメリカ本土で大変なことが起きているとみんなで話しているわけです。

ゲイコミュニティなどで、どうも新しい厄介そうな病気は、セックスと血液でうつるらしい、ウイルスが原因らしい、そこら辺まではわかるわけです。セックスと血液で感染する感染症であるならば、診療拒否は意味がない。根拠がない。手を握ったっていいわけです。治療法がなくなってもケアはできるはずだ、必要だと。そして、セックスと血液で感染するものならば、アメリカ本土から太平洋を越えてハワイに来るのは時間の問題で、水際作戦なんか不可能です。

来るんだったら準備をしようということで、そのときの合言葉が、「アメリカ本土の二の舞を演じるな」です。つまり、アメリカ本土で起きていることは、差別、偏見、排除、あんなみっともないことを起こすのはよそうというわけです。

そのために、医療の準備と社会の準備の2つの準備を始めました。医療の準備は、一番大きな病院の日系女性の看護師長さんが、「ハワイでは第一号の患者さんが出たときから、開放病棟で受け入れる」と宣言しました。どうしたのかと聞いたら、もちろん勉強です。準備会です。

セックスが絡んだ病気、しかも少数派から始まって、マイナスの出発をしてスティグマが貼りつけられちゃったような病気は、医療だけでは解決できない。差別を起こさないために、排除を起こさないために、社会環境を整えなければだめだというわけです。それで、ハワイではNGOが立ち上がりました。もちろんハワイ大学の先生たちも、行政も参加しま



した。私と同じ年のカナダからきたゲイの開業医の男性が事務局長になり、ケアプログラム、予防啓発、ホットライン、バディ、カウンセリング、エイズ教育などを行いました。ぶれいす東京がやっているプログラムはほとんどありました。

ゲイコミュニティ、多様な専門家、行政、医療などが集まって、医療側と社会側の準備をしたわけです。何でこんなスムーズな協働ができたんだろうということですが、一つの目標に向けて関連セクターが協力し合う、同じ目標に向けて、それぞれが役割分担をし、実践することで相乗効果を生んだのです。この連携の結果、ハワイでは第一号の患者さんからきちんと受け入れて、差別を起こしませんでした。

1985年に、HIV抗体検査が導入されるのですが、ハワイは全米のモデルケースになりました。州のSTIクリニックと民間とが協力して検査を促進しました。今もハワイはニードルエクステンションもあるし、迅速な検査、薬物治療などを積極的に行っているために、「HIV／エイズの発見や治療に最適な場所だと、防衛機関や患者は話す」とUNAIDS2008年報告書にあります。

## 何故、ハワイでできたのか

「だって、ハワイにはダミアンがいるんだからね」。ダミアン神父はベルギーの生まれで、ハワイへ志願して赴任した宗教家です。ハンセンコロニーにみずから飛び込んで、まずブラスバンドをつくり、「さあ、一緒に生きているうちは楽しもうね」ということを実践した人です。そして学校や教会を建てて、ハワイ中で基金を集めました。「モロカイの英雄」と彼は言われます。彼の行動に共感して、ハワイ王朝最後のリリウオカラニ女王は、何とコロニーに行ってしまうわけです。今から120年前ですよ、治療法もないときに女王自身が行ったんです。

ハワイにはダミアンがいるんだから、HIVはまったく問題ない、こういうことになるわけです。ハワイには、50%を超えるエスニックグループも、宗教的グループもないのです。みんなの意見を集約して、それぞれのためには何がいいんだろうということを考えていかなければいけない社会なんです。



1972年にハワイ州は全米で初めて人工妊娠中絶を合法化した州です。中絶は今もアメリカ大統領選挙の大きな政治争点になっています。中絶反対派は、中絶は人殺しだと言って反対しており、人殺しをする人は殺してもいいというので、産婦人科医を襲うくらい強烈です。

ハワイでは、合法化する前に、ダイヤモンド教授たちが中絶手術の知識と態度と実践について州民調査をしました。ハワイ女性のかんりの部分が、その当時はまだ合法ではなかった中絶を経験していました。しかも、中絶を経験している女性のうちの3割がカトリックです。その人たちは心情としては中絶を絶対認めない人たちです。調査の結果、知識と態度、心情及び実践は一致しないというデータが出たわけです。

中絶の実態については3つのグループに分けられました。1つは、お金持ちで、飛行機に乗って日本に来て中絶をして帰る、周囲に、妊娠して中絶したということは知られない。「ちょっと日本に観光に行ってきます」で済む。そんなお金はないという人は、ハワイの中で闇中絶をします。結構高いお金を払います。闇の手術ですから、感染症など危険を伴います。そのお金もない、産めませんという人は、自分で針金のコートハンガーを子宮に膣から突っ込む命懸けの行為をやります。

この結果を突きつけられた州議会の議長ヤノ氏は有名な日系のクリスチャンでした。中絶反対派は、あの人が州議会の議長だから、フィフティ・フィフティになっても、絶対中絶なんか反対するに決まっているから大丈夫だ、とたかをくくっていた。しかしヤノ氏は、州民のための政策決定責任者として、個人的心情を排し、平等かつ公正な福祉政策の実現

を目指すことを優先する、というので中絶自由化に1票を投じたのです。これは州民がびっくりしました。こうしてハワイは、全米で初めて人工妊娠中絶を合法化し、貧困層への経済的支援を提供しました。お金がなくても受けられ、安全な手術は平等に受けられる、これはすごいことです。

私がいた1980年代、ハワイでは、妊娠して子育て中の女子高校生が卒業できる特別クラスというのもありました。妊娠したら追い出すというのではないんです。強姦救援センターでは、8カ国語の無料通訳が準備されていました。観光客が強姦されても無料サービスを受けることができます。州民だけ、税金を払っている人だけがサービスの対象です、なんていうことは言わない。

ハワイは性についてオープンだし、多数派がいなくて、いかにすればより公平、公正かということに配慮するというのが伝統としてあります。それと、ハンセンから非常に多くを学んでいます。

## ピルとコンドーム

当時、ハワイにいて、「あなたは避妊は何でやっているか」と言うから、「コンドームだ」と言ったら、気の毒がられました。「まあ、かわいそうに、日本の女はおくれている。自分の体を、ホルモンを飲むことによって自分でコントロールをするのが進んだ女だ。コンドームは男に頼るでしょう。男に頼るなんて、だめじゃないの。気の毒ね、日本の女はまだだ」と言われて、私は大変に怒りました。

避妊は2人でやるべきだと考えもしていない。いつセックスがあるかどうか分かりもしないのに、女性がピルだけ飲んで体を準備して、男の人は避妊の避の字も心配しなくて済むというのはおかしい。男の人から性の健康のことを発想するチャンスを奪っているのです。

その後、HIVの波が襲ってきました。コンドームを手放していなかった日本の男女カップルは、かなりここで救われているはずですが。関係の中で起こることについて、私は、自己責任とか、自己決定とか決めつけられません。自分だけで決められないことがあるでしょう。2人で関係のなかで決めていったほうが良いということがあります。

## 「安心できるともっと感じる」

日本に帰ってまいりまして、日本のエイズNGO活動を始めました。2014年で20周年です。

今日、私は2つの言葉を皆さんとシェアしたいと思います。

1つは、「安心できるともっと感じる」ということです。それを英語で言うと、“Sex feels better when you feel safe about sex”です。

1995年にぶれいす東京のゲイグループが、新宿2丁目のゲイコミュニティで配るためのゲイコミュニティによるゲイコミュニティのためのゲイコミュニティの冊子をつくらうということになりました。当時、例えば東京都にエイズの啓発資材をつくるから、予算を下さい、助成金を下さい、と言ってもみんな断られました。なぜなら、対象が一部の人だからです。「ゲイですか。圧倒的に多数の人はゲイじゃありませんので」、こうなるわけです。

特に行政系の税金は、払ってくれている人になるべく公平に使わないと文句がくる、そういう言い方です。新宿2丁目だから、新宿といったら、「新宿2丁目に来る人は新宿区民とは限りません」と言われたんです。それはそうだけど、だから、何なのと（笑）。

どこからもお金がこないの、イギリスのフレディ・マーキュリー基金に申請して、日本でゲイのためのゲイの啓発冊子をつくると言ったら、資金を提供してくれました。うれしかったですね。

ベニスにコンドームをかぶせて射精したときをちゃんと実写したんです。「安心できるともっと感じる」というコピーを見た途端、私、目からうろこが……。なぜかといったら、安心できるともっと感じるって、みんなそうでしょう、女の人がよく言っていたことですよ。怖い、妊娠したら困ると思ったら、オーガズムのふりはできるけど、とってもじゃないけど……。

新たに『SEXUAL HEALTH BOOK ②』という新たな冊子を出しますが、トップページのコピーに「安心できるともっと感じる」とあります。20年使っていますが全然色あせない。

ぜひ、「安心できるともっと感じる」、コピーライトはありませんので、どんどん使ってください。こ

のコピーを作ったゲイの人に「使わせてね。うちのぶれいすではこれを全部使うからね」と言ったら、「どうぞ、どうぞ」と言っていただきましたので。

## “Living Together”

もう一つは、“Living Together”です。

2006年に第20回日本エイズ学会の会長をやりました。そのときのスローガンを“Living Together”にしたのです。日本でHIVの予防啓発活動をやり始めたときに、とってもまずいと思ったことがあります。これも言葉の問題です。

ぶれいす東京は、ある時、陽性女性2人に登場してもらって、私が司会をして、日本で初めてHIV陽性女性のシンポジウムを開きました。そのときに、参加者で「私はHIVのことをたくさん勉強して、大学でもやっています。ぜひNGO活動もやりたいです」と言った人がパッと手を挙げて、「あの、HIV陽性の人と共生するにはどうしたらいいでしょうか」、これが質問です。

「あ、ちょっと、それは困る。それじゃだめです」というふうに言いました。でも、教科書はこうなんです。小学校の教科書をチェックしてくれと言うので、読みました。5年生かな、エイズは「うつりませんリスト」がありました。御飯食べて大丈夫、お風呂大丈夫、そして血液の話で感染経路は終わりです。隣のページに囲みで、「エイズの人と仲よくしよう」と書いてあるんです。この発想は、要するに差別はいけないよと言ってさえいればいいでしょうみたいな、仲よくしようと言えばすむ、これって、私が10歳のときに感じた、男と女はLiving Togetherじゃないね、ということとつながるんです。

教科書を読んでください。男と女は第二次成長で違うふうに発達します。女の方は母親の準備をします。男の方は精子をつくります。精子をつくったら、性欲のコントロールが大事です。男の人と女の方は、性意識と性の構造が違いますと書いてあります。教科書に、男の人と女の方は性の意識や行動が違いますけれども、違いをよく理解して、仲よくしましょう、と書いてあります。

私はこれはとっても難しいと思います。違う、違うと言われたら、仲よくできない。違いを理解して



仲よくしよう、なんていう高度なことは私はできない。エイズの人と仲よくしましょう、というお題目と同じです。

先生方の研修会に行ったときに、「HIVの人と共生しよう」、「ゲイの人と共生しよう」と書いてありました。これはおかしい、共生というのが何やら難しい目標で、それに向けて努力しよう、というわけでしょう。何かおかしくないですか。

たとえば、「実は私、HIVなんです」と言ったときに、きのうとは違って、きょうから私と共生しなければいけない、そういう対象になるわけです。

私は、「共生しよう」という言葉は絶対使いたくないと思っていたんです。だって、もう、共にいるじゃないですか。残念ながら、うまい日本語が浮かばなくて、“Living Together”でいこうと。それで、「LT宣言」というのを学会のスローガンにしました。

2014年1月には、『SEXUAL HEALTH BOOK②』をつくります。2月11日に東京でお披露目セミナーをやります。ぜひ参加してください。



休憩をはさんで、HIV診療に携わる傍ら検査会場での検査告知、陽性者支援プログラム、薬物依存の実態調査などにも取り組んでいる大阪市総合医療センター感染症センター医長の白野倫徳さんと対談が行われた。その後、続いてアーティストで、1993年から13年間セックスワークに従事、同時に関西地域のHIV/エイズやセックスワーク、セクシュアルマイノリティに関するコミュニティ・ソーシャルワークに携わってきたブブ・ド・ラ・マドレーヌさんとの対談、そして最後に2人の対談ゲストをまじえ参加者とのディスカッションで幕を閉じた。